

蕉門秘傳白馬訓

中村俊定文庫

文庫 18

1006

8

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

蕉門秘傳白馬訓





蕉門秘傳白馬訓



一書なりとて切字を詮するなり。必あやうき切字を好
 今世上の亡自能字通十八の切字を（ふ）考うとて
 与る切字に似て之様なり。切字の形を眼
 たりとて他のもにあらへ自然なる悟るゝものなり。切
 字のうちに五同音なり。初能（一）て安（二）と（三）
 あり。凡そ此も蕉門に平所（一）てあつた音のたより
 と目（二）なり。切字の形を眼（三）たり。切字の形を眼（三）
 通（一）て此の音のたより（二）に似（三）たるなり。

五問答の正誤

問答 何ふ切字

問答 片之

問答 常之

問答 辛之

問答 是些列しある

川句

十の切字に 切字のふり切字
理の切字

唐詩の初花より 膝より
猫の足 止るま 関の膝月
景清の花見の床に七喜

梅の菜餚より 宿のころけ
夕白や 秋のころけ 瓢箪

おもしろいもの 能くあるもの 又おもしろいもの
ハ 或る小路の 木の下に 木の下に 木の下に
うへ 梅月堂 木の下に 木の下に 木の下に

一 服を連服も中絶も神志もれも五十歳より
之を他なることあるも服の神に付の事いふを爲
す。若し一服あるもあつた事ある。服を爲し
能く之を中絶の事ある。又聞ふ。

中絶の神志

一 二つを中絶の事ある。又聞ふ。若し服を中
絶する事ある。又聞ふ。

一 中絶の事ある。又聞ふ。若し服を中絶する

中絶の神志

一 比る事ある。又聞ふ。若し服を中絶する

一 名を中絶の事ある。又聞ふ。若し服を中絶する

中絶の事ある。又聞ふ。若し服を中絶する

一 中絶の事ある。又聞ふ。若し服を中絶する

一 神といふは神に由りて今世上
 に十神ありは知れども母を母といふは十神
 の知れぬ者なり十神いふは神の
 知れぬ者なり

神といふ神

一 神といふは神に由りて今世上
 に十神ありは知れども母を母といふは十神
 の知れぬ者なり十神いふは神の
 知れぬ者なり

イハスニハ

一 神といふは神に由りて今世上

一 神といふは神に由りて今世上

一 神といふは神に由りて今世上

一 神といふは神に由りて今世上

一 神といふは神に由りて今世上

一 神といふは神に由りて今世上

一 神といふは神に由りて今世上

名々新とて神を初く神とて
 一々の弘法
 をく味い知へん
 弘法の初に成りし活
 字を初とて色

死話 山崎

3

一四〇 月ハ露ヲ服ルコトヲ忌ム 融ク 融ト云フ也
にガシ 露ヲハフ 融ク 融ト云フ也
リセヌマニ 融ク 融ト云フ也

巧去之

一 是るはたゞ今世に世後字通も是るは
 其のうちにたゞ世も皆之の旨の如く是る
 其の如く今も其の如く其の如く
 の如く其の如く其の如く其の如く
 其の如く其の如く其の如く其の如く
 その如く其の如く其の如く其の如く
 の如く其の如く其の如く其の如く
 も其の如く其の如く其の如く其の如く

とて各所の雑誌から六つあるのとてまず
中世の雑誌から——其の初うきうの雑誌の
いふゆゑを考へてみる外はせぬ

引く 雑誌の派手な心 心

世間の主のやうなものであつて

ちやうど——

一 千の式にきつても、其の細くても、
むすんで、服も、何れも、目、常のあつて、
目、世の雑誌、服、世のあつて、

秋のうきと目、世の雑誌、大て、あつて、
あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、

あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、
あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、

あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、
あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、

被、被、被

あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、
あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、

そ

なま

恋

新紙のしるし

文新

何れも

林

なる

林

なる

新紙のしるしにせしめし秋のしるし

み歌のしるし

み歌のしるし

み歌のしるしにせしめし秋のしるし

み歌のしるしにせしめし秋のしるし

み歌のしるしにせしめし秋のしるし

み歌のしるしにせしめし秋のしるし

み歌のしるしにせしめし秋のしるし

み歌のしるしにせしめし秋のしるし

み歌のしるしにせしめし秋のしるし

み歌のしるしにせしめし秋のしるし

み歌のしるしにせしめし秋のしるし

親より見ると「高任のさうもさうのなれ」
聖と世の境あるも分けに世の中結さく
世のうらなうく「まゐ」のうに
も——に親のうのやうなれことと
表よりもありさう親のうをなくとも
そ女のかねも「さ」あるさうそよとある
神となさく「さ」あるさうさうなれさう

一 西衣の甚極「も」は「も」に冷泉家「も」今

世俗の知さういあらに「も」は「も」
西衣の甚極「も」は「も」に冷泉家「も」今
中「も」西衣「も」は「も」に冷泉家「も」今
の「も」は「も」に冷泉家「も」今
ふ「も」は「も」に冷泉家「も」今
「も」は「も」に冷泉家「も」今
あ「も」は「も」に冷泉家「も」今
川「も」は「も」に冷泉家「も」今

本の下にけり候も様

ふつらとひてあるを様

うぬぶらぬのけり人半おれさのうたへ
と他つとゆへ重く

一花の様けりちゆこちを様は安
せんいふゆへにけり高様
い花様と他を能考り花様
そとたのけり聖様のうたへ
様

とてはうけり花様もつら
せの様いふゆへにけり
聖は

山にけりけり花の
ぬ

とてはうけり花の
ぬ

けり花のけり花の
けり花のけり花の

一花の様けり花の
けり花のけり花の
けり花のけり花の
けり花のけり花の

金母はきふくし

那の客もくし多岐立

ふ

多のくしは極のふき

融自合自香きねを西にけりし切き
も必ありき一考ありきふき

一 くらぬ又表をくしは終に極に神極
名ありきくしは式極ありき又
心ありきくしは終に極に神極

くらぬ又表をくしは終に極に神極
名ありきくしは式極ありき又
心ありきくしは終に極に神極

世々々々々々

苦野

山

神香ふ山布留

神田

近江

山

戸名

高所

神

神

石

山

山

唐

山

高野

神

山

神

神

神

神

神

神

神

天橋立

作

神

神

何當報

二月浦
吟
阿
僧

振興

浪
花
描
唐
詠
次
唐
明
子
寫

男

白面
 杉島
 海老山
 二条
 白
 象
 浮
 柑
 酒
 寺

方丈、
所
方丈、
字名、
所、
在、
名、
有、
寺、

私曰二条家天下所已

五

居士涉問葛城白石

名
橋
之
記

勢田 長柄 木多 我 埋 木 櫓

川

玉川白川
若耶川
嵯峨小川

大井川
伊保川
衣川

名書

蚤蝶蛭蜥蜴蟾蜍

公序物

亭
時
村
句

くま

梅 唯一の神 桜 唯一の時 柳 唯一の時

桃 唯一の時 橘 唯一の時 柏 唯一の時

椎 唯一の時 榊 唯一の時 松 唯一の時

欽 唯一の時 桐 唯一の時 杉 唯一の時

柿 唯一の時

竹 唯一の時 竹 唯一の時 竹 唯一の時

竹

菊 唯一の時 菊 唯一の時 菊 唯一の時

牡丹 唯一の時 牡丹 唯一の時 牡丹 唯一の時

芍薬 唯一の時 芍薬 唯一の時 芍薬 唯一の時

五の月

待 唯一の時 待 唯一の時 待 唯一の時

名 唯一の時 名 唯一の時 名 唯一の時

十 唯一の時 十 唯一の時 十 唯一の時

松 唯一の時 松 唯一の時 松 唯一の時

韻字句の事

一 昔らに 韻字即 踏しそ 何を 一字にて 服 用
と 何なるも みの とも 何の上 韻字の 何なる 何なる
升 何なる 一 何なる 何なる 何なる 何なる 何なる
は 何なる 何なる 何なる 何なる 何なる 何なる

十ハの切字

ろ 何なる 何なる 何なる 何なる 何なる 何なる
ト 何なる 何なる 何なる 何なる 何なる 何なる
ぬ 何なる 何なる 何なる 何なる 何なる 何なる

服 何なる 何なる 何なる 何なる 何なる 何なる

何なる 何なる 何なる 何なる 何なる 何なる

天川地之新の湯水

何なる 何なる 何なる 何なる 何なる 何なる

初月の何なる何なる何なる何なる

何なる 何なる 何なる 何なる 何なる 何なる

昔ら何なる何なる何なる何なる

何なる 何なる 何なる 何なる 何なる 何なる

呻く啼きしてくさの陸

とまると

座崎に松の葉を——

柏と
口先をこき

似城のまへにやうやをのり

牧丈吉

とまるとこきまはるてちうとくしきやうな——

葉のまも四五のまう

牛ふ
お子

とまるとこきまはるてちうとくしきやうな——
とまるとこきまはるてちうとくしきやうな——

根のまも——

牛ふ
お子

とまるとこきまはるてちうとくしきやうな——

一う——

とまるとこきまはるてちうとくしきやうな——
とまるとこきまはるてちうとくしきやうな——

一洋韵をまも——

偏ハタラク
とまるとこきまはるてちうとくしきやうな——

とまるとこきまはるてちうとくしきやうな——

一花のまも——

とまると

一早ト

代いのま——

いふまゝに

ときをきかぬといふ時ハ代々のときと異なる所上あまな
 花とよき又りあるをそ花はかなしきまじふに
 ねの月とよ時いつれ中もそと
 代のきかぬといふ時ハ代々の
 ときと異なる所上あまな

切字の事

牽牛子

少のきくやゝのは

新屋のちを
たふし

考の身に神聖を稱ふ鐘

久
月
之
也
也
也
也

法士の禁煙の功

素丸
即前之
以勺抄取之
俟其乾
寫す

年玉のふもなつゝ一糸祝の雲

字部

晉書

素丸

第七 夫人宿夢夫人海客珠心

吾人之皆古之所謂

常ハ之ヲ功ノ既至之ヲ忘ル之ハ切

あなを四月の桑の葉

ちちなまそと
 ととのよらふ

とく子松那の土は是れ付

うらハ
甘きそ

菊はその
ち
り
れ
る
花

上、之、分、け、た、る、ゆゑ
之、を、抑、へ、る、事、は、な、し

山來の事

魚旦ハあまのついでに
 魚旦のふりしに魚旦と云

只そ倉々々々の富をたのま
つらに且つての心やいとおもふなりうこそ思ふこと
川

ふ代に 梅 柳 花
つらねのちねとらん花のうき
川

ふ福、 柳 花
つらねのちねとらん花のうき
川

ふ 草 中 へ にかいぬるふ柳
つらねのちねとらん花のうき
柳

ふ 草 中 へ にかいぬるふ柳
つらねのちねとらん花のうき
柳

ふ 草 中 へ にかいぬるふ柳
つらねのちねとらん花のうき
柳

ふ 草 中 へ にかいぬるふ柳
つらねのちねとらん花のうき
柳

ふ 草 中 へ にかいぬるふ柳
つらねのちねとらん花のうき
柳

ふ 草 中 へ にかいぬるふ柳
つらねのちねとらん花のうき
柳

ふ 草 中 へ にかいぬるふ柳
つらねのちねとらん花のうき
柳

ふ 草 中 へ にかいぬるふ柳
つらねのちねとらん花のうき
柳

ふ 草 中 へ にかいぬるふ柳
つらねのちねとらん花のうき
柳

一 井の中秋のふりしるるをわいふ

一 井のふりしるるをわいふ

一 井のふりしるるをわいふ

秋のふりしるるをわいふ

秋のふりしるるをわいふ

秋のふりしるるをわいふ

秋のふりしるるをわいふ

秋のふりしるるをわいふ

秋のふりしるるをわいふ

秋のふりしるるをわいふ

秋のふりしるるをわいふ

秋のふりしるるをわいふ

秋のふりしるるをわいふ

秋のふりしるるをわいふ

秋のふりしるるをわいふ

秋のふりしるるをわいふ

秋のふりしるるをわいふ

秋のふりしるるをわいふ

手帳より之を録し、字眼極いそはこ

一 花の極いひくさひにさうなまのれいこ

一 花の極いひくさひにさうなまのれいこ
を花の極いひくさひにさうなまのれいこ

細

花の極いひくさひにさうなまのれいこ

花の極いひくさひにさうなまのれいこ

花の極いひくさひにさうなまのれいこ

花の極いひくさひにさうなまのれいこ

花の極いひくさひにさうなまのれいこ

一 花の極いひくさひにさうなまのれいこ

花の極いひくさひにさうなまのれいこ

花の極いひくさひにさうなまのれいこ

一 花の極いひくさひにさうなまのれいこ

一 花の極いひくさひにさうなまのれいこ

花の極いひくさひにさうなまのれいこ

花の極いひくさひにさうなまのれいこ

花の極いひくさひにさうなまのれいこ

花の極いひくさひにさうなまのれいこ

花の極いひくさひにさうなまのれいこ

花の極いひくさひにさうなまのれいこ

花の極いひくさひにさうなまのれいこ

三易の夕年一

町をゆくや湖水のさへ

むろ

浅水の柳もさへ横切る

町を帰るやも花をみよ

きよ

古中 新海りの事

古 枯枝の鳥の泣きもこれ秋の事

中 枯枝の鳥の枝をわきの事

新 枯枝の鳥のうしろ林の事

利屋

磯名もさへ洞の事

什合の事

山を渡る舟の事

山を渡る舟の事

山を渡る舟の事

山の事

山の事

山の事

山の事

山の事

二月から今年いふのは梅

柳 さくら

是れは梅のうゑに花に二月のうゑに花に三月のうゑに花に

春の花

さくら さくら さくら さくら

さくら さくら さくら さくら

さくら さくら さくら さくら

詩の二義の内に花のうゑに花のうゑに花のうゑに花のうゑに

花のうゑに花のうゑに花のうゑに花のうゑに花のうゑに

花のうゑに花のうゑに花のうゑに花のうゑに花のうゑに

花のうゑに花のうゑに花のうゑに花のうゑに花のうゑに

花のうゑに花のうゑに花のうゑに花のうゑに花のうゑに

花のうゑに花のうゑに花のうゑに花のうゑに花のうゑに

花のうゑに花のうゑに花のうゑに花のうゑに花のうゑに

花のうゑに花のうゑに花のうゑに花のうゑに花のうゑに

花のうゑに花のうゑに花のうゑに花のうゑに花のうゑに

一 幸甚とて百重に人形をい人の形に似せし
如に隔るれ御機ひのききと御形なりとて

歌の奇特

延享廿四年の夏、唐崎の杉林の時勅使中
院中納言通世に歌の徳とて縁のきよゆりこは
成る御そに似し傳奏御覧

唐崎の杉林をよみての年の

ふたひとていふも

い新言とていふ

一 セクもたてたててききしとていふ

セクセクの清きに水もいふとていふ
い所もあてのけし

牙仙歌

一 裡の無とていふ、裡の無のききとていふ

一 懐のききとていふ、懐のききとていふ
ききとていふ

一 乃 ツエツキ 是の懐のききとていふ

杉島

杉島をよみていふ、杉島をよみていふ
一 杉島

松島やうを別くしむる

茶室

松島の松やうの松樹

茶室

とてま 未記

玉響は 露月まの五日式

とてま

玉響に 玉と角を 枯の風

今

とてま 未記

玉の 玉と角を 玉と角を 松島茶室

玉と角を 玉と角を 玉と角を 松島茶室

玉と角を 玉と角を 玉と角を 松島茶室

玉と角を 玉と角を 玉と角を 松島茶室

玉と角を 玉と角を 玉と角を 松島茶室

玉と角を 玉と角を 玉と角を 松島茶室

玉と角を 玉と角を 玉と角を 松島茶室

玉と角を 玉と角を 玉と角を 松島茶室

玉と角を 玉と角を 玉と角を 松島茶室

玉と角を 玉と角を 玉と角を 松島茶室

玉と角を 玉と角を 玉と角を 松島茶室

玉と角を 玉と角を 玉と角を 松島茶室

玉と角を 玉と角を 玉と角を 松島茶室

書^{御心} 記

服 日

才 日

才 日

名 日

名 日

名 所^{ハセナク}

名 本^{十二の月}

余^{てまは}

頃^{の月} 五^{の月}

名^ア

名^ア

名^ア

下^ア

上^ア

十^ア

名^ア

下^ア

名^ア

名^ア

神^ハ 記

名^ハ

名^ハ

名^ハ

名^ハ

名^ハ

下^ハ

名^ハ

名^ハ

待^ハ

名^ハ

名^ハ

名^ハ

名^ハ

名^ハ

名^ハ

名^ハ

名^ハ

下^ハ

冬の月

喜の月
記稿より伝ふ
はま白紙

何句又

今より仰る紙は控麻の筋に別書に記す
 をとり別紙にて控

一、省、署、販、賣、污、穢、之、藥、入、海、中、以

月
h

望奉行

少部 去 一 乃 入 凡 一 凡 个

一五、ハ心篇序歌曲流之是如前也、ハ意なれん

[illegible][illegible]

之柳月

7
2
2
2
2
2
2

黑曲

其之字依字書年終之字九人の所去る一より五
 とし中始之又末終と偏いしを更し
 席に仲人おしきし是に外やさき曲方
 ありき流に成れしはさきは如きうけ流
 是よりい付合ひし一と通ると思ふ

一 伽羅

又伽羅香一沈香

法華香

一伽羅香

一伽羅香

伽羅香

一 馬明燈

馬明燈

馬明燈

馬明燈

馬明燈

馬明燈

馬明燈

馬明燈

白牡丹の花の事

一 花

花

花

花

花

花

花

花

花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事

花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事

花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事

花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事

花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事

花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事

白の記

一 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事

花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事

花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事

花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事

花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事

一 花の事

花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事

一 花の事

花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事 花の事

乙
中
四

四
中
陽

一字值銀

一字除篇

一字地流

一字連讀

ち 燕
の 城
ハ ウ
ニ

千勺千石

解至白

楊
炯
之

ウ
ち
ろ
ろ
ろ
ろ

相
子
公
と
ん

三三三

山
如
風

新田沙彌の歌集の序

何とも文なきに
ほろもふ

移舟の道を通りて

代のちゆそ—客のねの月△

江連以吟
与
上
望
△

海
山
野
林

北

毒
子
母
の
洞
心
一
片

（字）の伝説

入
美の
月
と
知
て
味
の
全

卷之六

住

東都
白虎

一
夕
尾

叶

花もよそきて娘の浦へ水
流るや三井人の舟あり
詠日の月を影をみず秋風
一渡り繁しみの柳も
岸の風のよきや妹の水
よのうきともしに秋を待つ
一の星を語らん秋の夜
天の川地に船の渾水
一もくもく乙女の心細

代にさふさふと家のおのほ
美濃の屋敷の鴨の籠に
枕をひしきとてなつと水
氷風雪の物さうきとて
初風や十の日の空涼
初籠のうしろの木の
朧とてあふと初風
美濃のうしろの木の
一のうしろの木の

凡心月相を凡のさへ
 魂酒を情のさへ
 あり年頭もさへ
 杉のや底木の凡のさへ
 流のや室も流のさへ
 壺のや形様の後
 櫛のや納入のさへ
 お前もや枝も流のさへ
 此のやこゝろのさへ

もく掃や柳の中の家来
ちりちりの名主やみさう
草やうき屋あしめうき屋
うきやねふらふき屋の葉
ひらうき屋の葉の夕
今もはるる。十時
一りうき屋の葉の夕
柳の葉の夕
柳の葉の夕

時をわきまにうた川の
うらやみとせむか
人々にはうたのうた
うらやみとせむか
秋の懐度うた
船馬のうたうた
青柳のうたうた
花のうたうた
うたのうたうた

村のうたうた
うたのうたうた
うたのうたうた
うたのうたうた
うたのうたうた
うたのうたうた

十編 東鑑に白馬河内
十二編 うらやみ
白馬河内のうたうた

式部卿とあるは 秘蔵の書に 橋本五松の傳に
は 經の中に 教を云ふ 文章の趣に 論語
の義と 風論とを 云ふ

新訂の 秘蔵の書に 橋本五松の傳に
は 經の中に 教を云ふ 文章の趣に 論語
の義と 風論とを 云ふ



